第二十回日蓮宗北陸教区教化研究会議（平成十五年十一月十九日）資料

第二部会（新潟ブロック）

「現代に於ける葬儀の有り方について」

（座　長）豊田通則
（助言者）牛込覚心
（発題者）渡辺泰賢
（まとめ報告）生川義淳
（記　録）中村義昭

「平成の大不況」「政治不信」「凶悪外様犯罪」等で激動の二十一世紀の幕を開けた今日、我が日蓮宗は「立教開宗七五〇年」を迎えました。しかし〝檀信徒の寺院離れ〟〝信仰の無関心〟等で葬儀の時だけ寺院（僧侶）を利用する、いわゆる〝葬式仏教〟なる形になりつつあるのは、我が宗門のみならず、各宗派仏教全体がかかえる問題という事です。現実問題「葬儀」が活動面、収入面のほとんどを占めているのが各寺院の現状だと思います。しかし、この「葬儀」の主導権が寺院から「葬儀社」に移りつつあるのでは、という問題を今回の議題として取り上げてみました。そこで「葬儀」にかかわる「寺院」「檀信徒」「葬儀社」の各役割、問題点、課題等を討議、考察してまいりたいと思います。

1、現在の葬儀様式

・各地区の葬儀

以前は、自宅葬がほとんどでしたが、約二十数年前頃から会館葬が主流となってきました。これは、核家族化、住宅事情、時代の流れによる環境変化（近所、親戚、隣組付き合い等の希薄化）、準備・後片付け等が面倒（冷暖房完備、イス席で正座しなくてよい）、などの理由が挙げられます。後でも述べますが、花輪・祭壇の準備、火葬場の手配等の補助的な役割だった葬儀社が会場、料理等、葬儀金全ての内容をセレモニー化し、葬儀産業を確立した為です。その結果、葬儀の内容・時間等、会場の都合で簡略化されてきています。

・各地区の寺院の葬儀収入―相場

我が地区では、導師、脇僧二名での葬儀が平均的です。御布施の額は、枕経、納棺、通夜、葬儀、告別式、三十五日（初七日の場合もあり）、棺覆料、車代等あわせて約二十～四十万円位が相場となっています。※法号（戒名料）は、居士・大姉など特別な法号以外は、頂いていないところがほとんどです。

全国的に見れば、この我々の平均より少ないところもあれば、四、五百万以上（戒名料を含む）のところもある様です。墓地の価格もしかり、数万円規模のところから百万以上でも場所すら難しいところまで様々あります。

2、寺院、葬儀社との関係

・寺院側から見た葬儀社への意見

前の項でも述べましたが、通夜葬儀の開始時間、それに合わせた式の内容、時間、出棺後の流れ等、最近は会館側

の都合に合わせて行われることが多くなっていると思われます。葬儀社の中には、遺族から寺院への御布施の額を相談された場合に、参考額を記したプリントを配付しているところもあります。（図参照）

（例）新潟市郊外の市町村の例

葬　儀（告別式及び三十五日迄）

導　師

御布施　五萬円～十萬円　位

御佛前　〃　～　〃　位

棺覆料　一萬円～二萬円　位

役僧　×　人数

御布施　三萬円～五萬円　位

本来であれば、このようなことは寺院側との相談があってしかるべき事項だと思うのですが、まして葬儀社が金額例まで示すというのは、いかがなものでしょうか（この葬儀社の利用者案内パンフレットの「寺院への布施、費用」という項目に、イラスト付きで「菩提寺住職さんにご相談して下さい」と示してあります）。

3、寺院、檀家、葬儀社の関係

・檀家（遺族）側から見た葬儀費用

遺族が会館を利用した場合の費用はだいたい次の通りです。

祭　壇　三十～百万円　平均六十万円（会場使用料含む場合と別に取る場合があり）

霊柩車　三～四万円

棺　　三～十万円　平均五、六万円

お　斉　一人八千～一万二千円　平均九千円

お斉参加者へのお返し　五千～六千円

通夜参加者へのお返し　平均二千円

その他

（自宅葬の場合は、当然これよりも安くなります）

その他に遺族は、寺院～初七日・四十九日法要費、新檀家になると、仏壇・墓地墓石代等の出費があります。

現代の風潮として、葬儀費用は容認されるが、寺院への布施は高いととらえる人が多い様に思われます（信仰心の希薄、寺院・信仰離れ）。

また近年、葬儀を一～二僧で取り行う檀信徒も増えたように思われます。

・葬儀社の業務内容の充実拡大

はじめの前書き、前項「二」で述べたことですが「現在の葬儀の内容、告別式の流れ」が、寺院側主導というよりも、葬儀社主導の形で流れているということは、時代の流れに乗り、葬儀社側がその時代にあった業務内容充実拡大してきた為です。

以前、自宅葬主流の時は、各地区で共同の祭壇があったり、通夜葬儀・告別式の準備、手伝い等も親戚・近所の方（町内会、隣組）が協力してやってくれていました。

最近は、そのような付き合いもなくなりつつある時代となってきました。ましてや、近い親戚にあたる人でさえ「仕事があるので」「住所が遠いので」との理由で、参列してもすぐ帰っていってしまいます。（葬儀・告別式の翌日、初七日をやらない家のほとんどの理由が面倒との思いもあり）冠婚葬祭は、日常生活の中で重要な（はずせない）日だ、という意味が、最近はあまり重要にとらわれていなくなってきている様な気がします。

4、今後の寺院のあり方を考える

・二十一世紀の寺院運営

以上の事をふまえた上で、今後の寺院運営について考えてみたいと思います。

① 葬儀社側主導ではなく、寺院側主導に。

② 葬儀費用、布施、法号（戒名）に地域格差をなくす。

（高すぎず、少なすぎず、平均的に）

③　檀信徒（檀家）との良い付き合い―信仰心の向上、寺院葬等、寺院の開放―身近な関係

①については、悪い意味ではなく良い意味で〝寺院側主導〟になってほしいものです（関東地区等では、寺院・宗門で経営する葬儀社もあります）。

我々寺院側からすれば「葬儀社のおかげで大変良い有意義な葬儀を行うことが出来た」と思える様になれば良いと思います。

※　余談ですが、ある葬儀会館のように、通夜に行きますよと駐車場（ポールを持った係員三～四人付）で毎回のように駐車スペースがない、と言われ（三十台位のスペース付）、離れた場所へ回される、などという事はもうされたくありません。五回のうち、三回以上はこんな状況です。大雨の時などは、泥のある砂利のところへ回されます。会館の人間にそのたび注意しても、いつまでたっても何も改善されません。

葬儀社がセレモニー化し、葬儀産業を確立した様に、我が寺院側も何か良い策を考えねば、と思いますが……。

②については、布施、法号等の高い地域・寺院と、そうでない（檀家が少ない、布施が少ない）地域・寺院との格差が少しでも縮まれば、という問題です。ここに墓地問題も加わります。

その結果、③の檀信徒（檀家）との良い付き合いにも少なからず影響があると思います。あと、礼参り、墓参り以外の寺院使用（会合、行事、葬儀等で本堂・庫裏を使用）を行い、寺院施設の開放を行ったほうが良いと思います。「面倒くさい」「掃除、片付けが大変」等の意見を聞くのですが、本来、本堂・庫裏というのは自分（各僧）とその家族のもの（家）ではなく、檀信徒、各檀家のものである、と改めて自覚することが大切だと思います。

以前は、近所・檀家の集う場所、悩み事の相談等、地域のまとめ的、役所的な役割を兼ね備えていた寺院でした。核家族化、少子化、近所・親戚付き合いの減少といった現代に、少しでも人々との付き合い、ふれあいの場が増えていけば良い関係になるのでは、と思います。